警視庁特殊超能力課の日常

如月桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

警視庁特殊超能力課の日常

【Nコード】

N7347K

【作者名】

如月桐

【あらすじ】

警視庁少年課にいた刑事「梅宮 隆司」淡々と少年犯罪者を捕まえる日々、刑事としては刺激のない日々、でもそれでもいいと思っていた……。

しかし突然幹部に“特殊能力警察部隊”に飛ばされ、20歳以下白虎だけの部隊に入ること……、しかも特殊能力警察部隊トップ、警視長に「15歳（推定）の女の子と同居しろ」と意味の分からない任務を与えられてしまい……『俺の日常はどこへ行った!!』

／／厨房が書いてる小説なので意味の分からない話になると思いますが、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです／／

死にたがり

痛かった、いつもいつも痛かった。

苦しかった、心臓をずっと捕まれている感じだった。

生きてる心地がしなかった、生きるということが分からなかった。

“ 何故自分は死なないのだろう ”

“ これだけの事をされて、何故死ねないのだろう ”

死んだら楽になれると思っていた。

今までよりずっと痛くても、どれだけ苦しくても

死ねるのなら、それでよかったのに。

《どんな物を持ってくるか分からない》

《可哀想だが・・・“殺す”しかないな》

銃を向けられた、白い服で全身を覆っていて顔も分からなかった。
これで死ねるんだ、白い人は私の心臓を狙っているんだ。
やっことやっと・・・死ねるんだ。

地獄から開放されると思っていたのに。

死ねなかった、あんなにも死にたいと思っていたのに

“死にたくなかった”

怖いと感じてしまった、まだ生きたいと思った。
死ぬということがこんなにも怖いことは、幼い私には分からなくて
銃を向けられる前までは、死ぬると思っていたのに。

必死だった、死にたくない死にたくない。
それだけの気持ちで、暴れた。

暴れてる時の記憶はなかった。
気が付けば、すべてが壊れていた。

手のひらを見た、赤い液体が付いていた。

舐めてみたら、しょっぱかったやっとなつた。誰の血だとは分からなかった。

“先生達”は死んだ、白い人も死んだ。

そう思うと、笑えた。

どんどん笑いが大きくなつて、止まらなくなつた。

私を殺そうとした、人達は皆死んだ。

死にたがりは死ねなかった。

いつ笑うのを止めて、いつあこから出たのか覚えてない。

気が付けば、東京にいた。

死にたがり（後書き）

ついに始まってしまった！！／＼。 。 （ ）／

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7347k/>

警視庁特殊超能力課の日常

2010年10月9日21時48分発行